
S A A

霊落 苦楽

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

S A A

【Nコード】

N 5 6 8 0 P

【作者名】

霊落 苦楽

【あらすじ】

S A A 部、それは学校の規則を絶対とする部活である。

プロローグ

ここ、黒川高校にはほかの学校に無いであろう珍しい部活がある。その部活とは、先生と生徒の悪業、悪事を暴いていくというものである。部活名は、S A A部のメンバーは全員2年生で3人、角谷、桐野、柄木。これから、この3人が沢山の先生の悪業を暴いていきます。どうぞ、楽しみに。

「煙火先生、あなた、この学校でタバコ吸ってますね？」

「!!! な、何を言っているんだ、角谷。私は、タバコなど吸っていないぞ」

「本当ですか？ でも、この学校の生徒が沢山見ているんですけどね。あなたがタバコを吸っているとこを」

「くっ！ だがしかし、生徒の証言だけじゃ、証拠にはならないぞ？ 角谷」

「それくらい分かってますよ」

「そういつと、角谷はズボンのポケットをこそごととあさり何かを取り出した。」

「これを見てもそんなことが言えますか？ 煙火先生」

「角谷が取り出したものとは、煙火先生がタバコを吸っているところの写真だった。」

「くそっ！ もっと周りに気を配ってあげば!!!」

「煙火先生、校長先生の所に行きますよ。タバコだから、罰金5千円くらいじゃないですか」

「くそっ！ S A A部なんて部活がなんでできたんだ!!!」

「はいはい、ちょっと黙ってくださいね。煙火先生」

この学校では、学校の規則に反したら問答無用で金と取るという、罰金制が取り入れられている。生徒のほうは先生より多少罰金の額が少ないものの1万円取ることもある。このS A A部とは、学校の規則に反している先生、生徒を校長先生に突き出すという部活である。

プロローグ（後書き）

初めまして、新人の霊落 苦楽です。最後まで読んでいただきありがとうございます。次の話も読んでいただくと、うれしい限りであります。

生徒と先生の悪業か？

ここ、黒川高校にはほかの学校に無いであろう珍しい部活がある。その部活とは、先生と生徒の悪業、悪事を暴いていくというものである。部活名は、S A A部のメンバーは全員2年生で3人、角谷、桐野、柄木。これから、この3人が沢山の先生の悪業を暴いていきます。

とある教室の中、3人の生徒がいた。1人はきつちりした学級委員長のようなオーラを放っている（実際に学級委員長なんだけどね）けっこうかつこいい男子。1人は最初の1人とは逆で、かなりチャラチャラしていそうなイケメン男子。1人は、髪を腰ぐらいまで伸ばした美少女。

「ねえ、柄木」。最近、なんかやつてる生徒や先生見てない？」

と、美少女、、、いや、桐野が学級委員長こと柄木に話しかけた。「いや、残念なことに見ていない」

そういつて、柄木と桐野がうなだれていると、チャラチャラした男子、、、角谷がこの前の報告のようなものをした。

「俺はこの前、煙火を校長の前に突き出したぞ」

角谷がそういうと、うなだれていた2人が同時に角谷を睨みつけた。

「どうやってそんなに先生の悪業を見つけることができるんでしょうね」

「そうだよ、角谷って結構生徒より先生の悪業を見つけてるよね」

柄木と桐野は、そんな疑問を角谷に投げかけた。

「うん、、、カンかな」

角谷はちゃんと答えたのに何故かジトッと見られていた。

「えっ、、何？　ちゃんと答えたよね、俺」

「いや、なんかムカついたからだ」

「、、、、！！！！　ちよっと2人とも静かにしといて」

「？　なんで？」

「いいから」

3人が静かにすると、隣の教室から声が聞こえてきた。

「、、、、つた、この、、トの、、たえだな」

「おね、、、、します。、、の出世を、、てます」

そして、ガラッという音がした後2人の人が出ていく足音が聞こえた。

「これ、なんだったんだ？」

「ちよーっとな待って」

「なんだよ、桐野」

「この件は、私が見つけたものよね？」

そういうと、桐野以外の2人は黙った。

「ということ、この件は私がやりまーす！」

「じゃ、まあがんばってね」

「ファイト！」

「これは結構大きそうな感じがするよー」

生徒と先生の悪業か？（後書き）

お久しぶりです。 霊落 苦楽です。 またも読んでいただき光栄であります。 次の話も読んでいただけると嬉しい限りであります。

悪業発見！ & a m p ; 解決！！！！

桐野達きりやが見つけた、きりや、というか聞いた生徒と先生の話し声。その内容は途切れ途切れだったが、途切れた部分を適当な言葉で繋げてみると結構大きい話になりそうだった。桐野はすぐにこの件を自分ができるという調査を始めた。

- - - - -

「きりや、きりや、といつてもなきりや声だけでは先生しか分からないからなきりや、生徒の判別がつけられないな」

そついうと、桐野は黙り込んだ。

「きりや、きりや、きりや、まあ、基本に戻つて分かっている人物の周りを調べてみるかきりや。えきりやつと確かあの声は、きりや、天壤先生だよね^{てんじょう}」

そして、桐野は天壤先生のこの頃の行動を生徒などに聞いて探り始めた。

- - - - -

「うきりやん、あんまり情報を得ることができなかったなきりや。次は、放課後！先生をつけてみるか」

そして桐野は、放課後まで待った。

放課後になつてから桐野は天壤先生つけていた。きずかれないように、静かにゆつくりと、きりや。20分後、天壤先生はある男子生徒と合っていた。

「並河^{なみかわ}、これが今度の期末試験の問題と解答だ。ほら^{なみかわ}カシャッ

「きりや？きりや？何の音だ？まあ、いいか」

「ありがとうございます、天壤先生。先生のクラスの生徒の点数が上げれば先生の信頼度も上がります」きりや「ああ、だからしっかりやってくれよ？」

「分かってますよ」

「じゃあ、また今度な」

「はい」

そして、2人は教室から出て行った。桐野は物陰に隠れていたが、先生達が出て行ったと同時にその物陰から出てきた。

「くくく、やったぜ！ ビックだぜ！！ さあ、期末が終わったらまた会うだろうからその時捕まえるか」

桐野は意気揚々とその場を立ち去り家に帰った。

- - - - -

2日後、期末試験が終わった。そして、桐野の予想通り天壤先生と並河という生徒はいつもの教室で会っていた。

「よし、期末は終わった。証拠隠滅のため解答を返してもらおう」

「分かってますよ」

並河が解答を出そうとした時、桐野は教室の中に突撃した。

「はいはい。現場をおさえましたよ」

桐野を見た先生と生徒はこの世の終わりを見たような顔をした。

「、、、S A A部」

「はい、そうですね。S A A部です」

「なんでここに、、」

「あなた達の悪業を見つけたからに決まっていますよ」

「お、俺達は悪業なん」

「こんな圧倒的な状況でいいわけですか、、はあ、意味が分かりませんね」

「くっ」

「さあ、2人とも校長センセの所にいきますよ」

そして、2人はいいいけすらもできないまま校長の所へと連れて行かれた。罰金の額は先生は2万円。生徒は1万円。実際は校長はもつと取りたかったらしいが、やめたらしい。何故かは知らない。だがしかし、この罪はこんなに罰金を取るほどの重罪ということに

は変わらない。

悪業発見！ & a m p ; 解決！！！（後書き）

どうも、霊落 苦楽です。今回も最後まで読んでいただきありがとうございます。

感想やアドバイスをもらえると嬉しいです。そして、次の話も読んでいただけると嬉しい限りであります。

同盟

桐野^{きりや}が結構大きい生徒と先生の悪業を見つけてから、1週間がたとうとしていた。これといってなんの悪業も見つからずS A A部のメンバーは教室で作戦会議(?)をしていた。

「この前の悪業が大きかったから最近のやつがつまらなくなってきた」

と角谷^{つたに}が溜め息交じりに呟いた。それに同意するかのように柄木^{つかぎ}も溜め息をした。

「へへ〜んだ。そちら方の行動が遅いからつまらない悪業しか見つけれないんだよお？」

桐野が二人を馬鹿にするような感じでそう言った。すると角谷がいきなり立ち上がり。

「あつ、、、今かちんときた、、、」

角谷がそう言うともたも柄木が同意するかのように声を出した。

「僕ですよ。角谷、、、珍しく意見、、、というか思っていることが重なりましたね」

「ああ、、、」

そして二人は互いに向き合い腕相撲のように手を結び叫んだ。

「同盟だ!!!」

そう言うって桐野だけを教室に残し二人は出て行った。

「、、、なんなのあいつら」

桐野は少し笑い交じりに呟いた。

別の教室で角谷と柄木は同盟を組む際の契約事項などを決めていた。

「まず、初めに見つけた悪業は独り占めせずに報告し合う、、OK?」

と柄木が言っていると角谷はグツと親指を立ててOKと言った。それから約1時間、二人はずっと契約事項を決めていた。

決め終わると二人はすぐに帰り悪業を見つけるための準備をした。まあ、準備と言ってもカメラや補聴器（人の話し声をしっかりと聞けるようにするため）の調子を確認するだけだけど、、。そんなこんなで同盟を組んでからの初めての悪業捜査が始まった。

同盟（後書き）

どうも、お久しぶりです。霊落 苦楽です。今回も最後まで読んでいただきありがとうございます。次の話も読んでいただけると嬉しい限りであります。

同盟組んでからの初悪業

角谷と柄木が同盟（？）をつたにをつかぎを組んで少し大きな悪業を見つけようと頑張り始めました。さあ、この二人はまず始めに悪業を見つけることができるのでしょうか。

- - - - -

放課後になり角谷と柄木は二手に分かれて悪業探しを始めた。探し始めてから1時間、どちらも当たりはなかった。しかし、二人は諦めずに探し続ける。

探し始めてから2時間、角谷の方に当たりが来た。角谷は現場の写真をすぐに撮るとそそくさとその場を逃げ出した。

- - - - -

「柄木！ 悪業発見したぞ！！！」

と報告をした。すると、柄木がいつもはまったくと言っていいほどやらなかった笑顔をした。

「本当か、角谷！ どんなのだ、写真は撮ったろ？ 見せてみる！！！」

柄木は悪業が見つかったことへの喜びをまったく隠さずに命令口調で角谷に言った。しかし角谷は命令口調が頭に來たのか出そうとしていたカメラをポケットに戻した。

「命令口調は嫌いだなあ」

角谷は遠回しに今さっき言い方を直せと言った。

「ああ、すまない。、、、写真を見せてくれないか」

「いいぜ。今回は多分大きいと思うぞ」

そう言っ、今さっきしまったカメラを取り出し写真を見せた。

「ほう、売買か、。移動している金はどのくらいだ？」

「少ししか見えなかったけど見えた範囲でのおよその額は2万だ」

「かなりの移動だな。品はなんだ？ ゲームか？ 本か？ まあ、本で2万は無いか」

「いや、本であつてるぞ。本の冊数は5冊。たぶん相当の値打ち物だと予測する」

「？ なんで本と分かつたんだ？ この写真には見えないが、、」

「会話で言つてたんだよ。明後日、品は持つてくるって言つてたぞ」
「てことは、、」

「ああ、明後日が本番だ！！！」

「明後日が楽しみだ、、フフツ」

そして、二人は不気味に気持ち悪く笑いながら家に帰つて行つた。

同盟組んでからの初悪業（後書き）

お久しぶり（？）です。 霊落 苦楽です。 今回も最後まで読んでいただきありがとうございます。 次の話も読んでいただけると嬉しい限りであります。

同盟組んでからの初悪業解決！！

角谷と柄木つたに つかぎが同盟的なものを組んでから初の悪業。明後日が楽しみでたまらないらしいが本当に大丈夫なのだろうか、二人は、。

- - - - -

いよいよ、二人が待ちに待った明後日がやってきた。角谷と柄木はいつもではありえないぐらいのテンションで学校へとやってきた。「放課後にはやくなりませんか、フフッ」

「そうだな！！」

、、、なんか、新しいゲームが買ってもらえてそれを早くやりたい小学4年生のようだ。本当に大丈夫なのだろうか。

「なんかやけにテンションが高いわね、、、どうしたの？」

と二人のテンションが心配になったのか桐野きりやが話しかけてきた。

「ん？ お前に教えるわけなからう」

そう言って角谷は桐野を軽くあしらうと柄木とまた話し始めた。

- - - - -

そして放課後になった。角谷柄木は前に交渉が行われていた教室へと向かった。

「さあ、悪業者を捕まえますか」

「ああ、そうだな」

二人は教室に乗り込み品の受け取り最中の二人の生徒を捕まえた。もちろん、その生徒二人は言い訳をしようとしたが証拠写真などによつて言い訳はなんの効果もなかった。

罰金額：受取者2000円 受け渡し者5000円

受け渡し者の罰金額が高いわけは売った本の額が高かったからである。そして、その本は普通に買えば500円程度のものだがその本の著者の直筆サインが書いてあると嘘を言って詐欺をしたからで

ある。

- - - - -
角谷と柄木は悪業をやった生徒を校長先生に突き出していつもの教室へと帰ろうとしていた。

「やったな。柄木」

「ああ、やったな。角谷」

二人はそう言うと同盟を組んだ時のように手を握り合った。そして、角谷がまた一緒に悪業見つけようぜと言い、柄木はああと言った。

- - - - -

その頃、桐野は教室で一人悲しく椅子に座っていた。

「はあ、あいつらまだかな」

同盟組んでからの初悪業解決！！！（後書き）

お久しぶりです。 霊落 苦楽です。 最後まで読んでいただきありがとうございます。 話についてや文法についてアドバイスがもらえるとありがたいです。

次の話も読んでいただけると嬉しい限りであります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5680p/>

S A A

2010年12月30日23時02分発行